MYSTERYDOKUSHOANNAIMYSTERYDOKUSHOANNAIMYS

ミステリ読書案内

２０２３．１２．６　発行元
第 534 号　伊藤　剛
https://mystery-dokuan.com

MYSTERYDOKUSHOANNAIMYSTERYDOKUSHOANNAIMYS

横溝正史「ベスト表」(再掲)

戦前・戦後の日本のミステリを語る時、その中心の位置にいる作家の一人が横溝正史。その横溝正史の『ベスト表』を再び取り上げてみることにした。今も話題になり、読み継がれている作品の数々を見てみよう。

戦後の日本ミステリの幕開け

角川文庫の横溝正史シリーズ、ここ数年再刊が続いていたが、ほぼ一区切りがついたようだ。図書館にも並べられてある。問題は、若い世代の読者がどの程度増えたかだと思うのだが…。次の世代、次の世代と読み継がれていくことが大切なのだ。横溝ミステリすべてとは言わないけれども、主なる作品はこれからも残っていってほしいと願う。

以前の『代表作』の号で取り上げたのは『獄門島』『八つ墓村』『本陣殺人事件』の三冊。他にも有名な作品がたくさんあるのだが、今回取り上げたのは『蝶々殺人事件』と『犬神家の一族』。共に戦後の日本ミステリを語るには欠かせない作品と言えるだろう。

『蝶々殺人事件』

１９４６年に雑誌『ロック』に連載された作品。単行本は１９４８年に月書房から出たのが最初か。戦前から探偵役だった由利先生が登場する。私の手元にあるのは１９７３年の角川文庫版。この本には長編『蝶々殺人事件』と短編『蜘蛛と百合』『薔薇と鬱金香』が納められている。クロフツの『樽』を思わせる「コントラバス・ケース」に入った死体の移動がポイント。

冒頭を見ると、戦後すぐの時期に新聞記者の三津木俊助が由利先生の元を訪ね、ノートを預って戦前の昭和十二年に起きた事件を物語に書き始めるという流れになっている。その事件というのは歌劇「蝶々夫人」を演ずる原さくら歌劇団で発生した。東京での公演を終え、大阪に移動することに。何らかの事情で大阪のホテルに到着したはずのプリマドンナでソプラノ歌手の原さくらの姿が消えてしまった。数日後、彼女の死体がコントラバスのケースの中から見つかった。ケースの中には薔薇と砂が見つかり…。果たしてこの複雑に見える事件の真相は…。

『犬神家の一族』

１９５０年に雑誌『キング』に連載された作品。単行本は翌年の講談社『横溝正史集』に『八つ墓村』と合本で出たのが最初だろうか。私が角川文庫版で読んだのは１９７５年のこと。その翌年に角川映画となり、そちらも封切後直ちに見たので、特に強烈な印象に残ったものと言えるだろう。湖面に逆さまに突き出した脚や、不気味な仮面を被った佐清の姿…などが思い浮かぶ。

第二次世界大戦が終戦になった二、三年後の出来事。信州財閥の中心人物だった犬神佐兵衛が亡くなった。その遺言書を扱うことになった古舘法律事務所の若林から金田一耕助に依頼があった。しかし、若林は最初の被害者となり、遺言書の開封は大騒動のきっかけになっていく。三人の娘とその子どもではなく、佐兵衛の恩人の娘・珠世が相続人に指定されていたのだ。「斧・琴・菊」の宝と財産の行方。佐清、佐武、佐智の三人の孫たちは…。戦争から復員したばかりの佐清は顔面を怪我しているので黒い頭巾を被っている。やがて次の惨劇が引き起こされ…。

《横溝正史作品のベスト表》

１．獄門島
２．八つ墓村
３．蝶々殺人事件
４．本陣殺人事件
５．悪魔の手毬唄
６．犬神家の一族
７．悪魔が来りて笛を吹く
８．三つ首塔
９．女王蜂
１０．夜歩く
１１．病院坂の首括りの家
１２．悪霊島
１３．真珠郎
１４．鬼火(短)
１５．不死蝶
１６．迷路の花嫁
１７．悪魔の寵児
１８．吸血蛾
１９．女が見ていた
２０．怪物男爵
２１．殺人鬼(短)
２２．幽霊鉄仮面
２３．夜光怪人
２４．金田一耕助の冒険(短)
２５．幽霊男
２６．まぼろしの怪人
２７．死神の矢
２８．死仮面
２９．怪盗Ｘ・Ｙ・Ｚ
３０．幽霊座（短）
３１．びっくり箱殺人事件
３２．黄金の指紋
３３．金田一耕助の冒険２(短)
３４．花園の悪魔（短）
３５．夜光虫
３６．大迷宮
３７．迷宮の扉
３８．夜の黒豹
３９．毒の矢
４０．仮面劇場
４１．扉の影の女
４２．志那扇の女
４３．姿なき怪人
４４．壺中美人
４５．魔女の暦
４６．スペードの女王